

118 《ホロフェルネスの首を斬るユディト・第2作》

カラヴァッジョの真作か贋作か

2024（改訂版）

真鍋友範



1 作品の由来

まずは、ウィキペディアの解説を引用する。

1607年6月14日にナポリを出発したカラヴァッジョは、《ロザリオの聖母》と《ホロフェルネスの首をはねるユディト》の2枚の絵をナポリのアトリエに残した。その [絵画](#) はフランドル地方の画家で美術商のルイ・フィンソンとアブラハム・ヴィンクが共有することになった。

フィンソンは、ナポリを離れて 1609 年頃にアムステルダムに定住した際に、この 2 枚の絵を持ち運んだという。後にフィンソンもアムステルダムに移り住んだ。この二枚の絵に関しては、フィンソンがアムステルダムで作成した 1617 年 9 月 19 日付の遺言書に再び書かれている。

フィンソンの遺言でヴァンクがナポリ時代から共有していた 2 つのカラヴァッジョの絵画を所有することになった。フィンソンは遺言書を作成した直後に亡くなり、相続人のヴァンクはその 2 年後に亡くなった。

ヴァンクの死後、彼の相続人が、少なくとも 1619 年以降に《ロザリオの聖母》を 1800 フロランでアントワープのドミニコ会の聖パウロ教会のために、ペーター・ポール・ルーベンス率いるフランドルの画家とアマチュア委員会に売却した。

1786 年、オーストリア皇帝ヨーゼフ 2 世は、役に立たない修道院の閉鎖を命じ、カラヴァッジョのもう 1 枚の [絵](#)《ホロフェルネスの首をはねるユディット》をコレクションに加えた。

この作品はアントワープを代表する芸術家たちが贈ったものであり、その深い宗教的な献身を表現したものであったため、フランドルのオーストリア支配者たちの略奪の対象となった。

《ホロフェルネスの首をはねるユディット II》は、メトロポリタン美術館の学芸員ケビン・クリスチャンセンをはじめ、イタリアのバロック芸術の著名な専門家であるデビッド・ストーンなどなどその信憑性に関して複数の権威から裏付けされているが、16~17 世紀のフランドルの画家でカラヴァッジョの仲間である [ルイ・フィンソン](#) によるコピー [作品](#)、もしくはオリジナル作品であると主張するものもいる。

■参考文献

・[https://en.wikipedia.org/wiki/Judith_Beheading_Holofernes_\(Caravaggio\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Judith_Beheading_Holofernes_(Caravaggio))、

2020 年 11 月 7 日

要約すると、記録文献上、カラヴァッジョは、ナポリ滞在時代に、この作品を作成したようだ。所有者がナポリを離れ、アムステルダムに移住した為、作品はイタリアを離れた。

この作品を、カラヴァッジョ真作とする支持者と、カラヴァッジェスキの一人であった、フランドル画家ルイ・フィルソンのコピー作品、もしくはオリジナル作品という説が存在するようだ。

まず、モデルは誰だろう。ローマ時代の娼婦フェリデは、その後、女官へと出世したという。だとすれば、カラヴァッジョの新作絵画のモデルになる為に、ナポリまで赴き、該当絵画のモデルになったことになる。背景に、十分な財力を獲得していれば、この行動が起こる可能性はある。

だが、スペイン派の教皇が即位し、取り巻きの枢機卿の多くは、スペイン派であった時期だ。

つまり、女官となったフェリデが、ローマからナポリに行こうとするなら、当然カラヴァッジョ暗殺の使命を帯びた追手が、フェリデに追従する筈だ。

ナポリでの、フェリデの再度の画モデル役は、その危険度から、実現しそうな状況だとも考えられる。

また仮にモデルがフェリデであったのなら、その容貌に関しては、第1作との時間差相当の容貌変化は感じられる。第1作のフェリデは、第2作より、明らかに若いのだ。この辺りは、辻褄は合っている。

不明点が多いが、何らかの文書による記録が周辺に残されていれば、真実の裏付けとなるだろう。

さて、剣の持ち方は、正しい。《ホロフェルニスの首を斬るユディト・第1作》では、モデルのフェリデの剣の持ち方では、到底ホロフェルニスの首ははねられないものであったのと比べ、順当な剣の握り方だ。

カラヴァッジョの描き方での訂正があったと推測される。

背景はどうか。緋色の布は、カラヴァッジョ宗教画内で、よく登場する、典型的なモチーフだ。特に問題なく描かれている。

侍女の老婆の喉のあたりも、正確に病状がありのままに描かれているが、これもカラヴァッジョらしい飾らず、正確に事実を描くという描写スタイルが窺え

る。

全体的な完成度は高く、構図に於いても破綻なく、うまく描かれている。

キアロスクーロ表現でも、カラヴァッジョの特徴が表現されている。

総じて、現段階では、特に文句の付け所のない秀作に感じる。

2 疑わしい点とは

本作品の疑わしい部分とは、近年における発見経緯だ。

何故なら、典型的な贋作発見ケースにピッタリ合致するからだ。

カラヴァッジョの逃亡滞在地のナポリで描かれたという記録はあるようだ。その後フランドルの美術商から、オーストリア皇帝に渡り、フランドルの支配者たちの略奪対象になり、行方不明になった作品が、近年の2014年にフランストゥールーズの家屋の屋根裏から発見されたという。(参考:Wikipedia 2024より)

3 出来すぎた作品発見パターン

しかし、どうしても気にかかる点とは、作品の発見経緯だ。

作品が描かれた過去の記録は残っていたものの、作品が近年になってから、フランスの地方都市の屋根裏部屋から見つかり、作品真贋の裏付けを美術館から取り付けた後、作品がルーブル美術館に売られることなく、専門家の複数の鑑定を受けた後に、より高値をつけた個人に2019年に買われたという事実だ。

仮にも美術館に売られていれば、真贋検査の為に再度のX線検査や画材の成分分析など受けられたかも知れないが、その機会を逸している。

つまり、カラヴァッジョの真筆であるという裏付け確認が、充分になされることなく、個人所蔵(メトロポリタン美術館理事?)されている。

この発見からの経緯事実は、過去の典型的な贋作偽造の出現ケースにピッタ

り当てはまってしまっているのだ。

4 結論

作品は、レベルの高い完成度であり、カラヴァッジョの特徴がよく現れている。オリジナルの第一作以上にリアリズムの完成度が高いくらいだ。

しかしながら、発見経緯には怪しい部分が存在している。

従って、現時点（2024）に於いて。真贋の決着は付けられないと感じるのだ。

後世、同時期に描かれた《ロザリオの聖母》と比較し、第3者の立場の美術館が主体となり、絵の具の成分比較検査など行い、精密な再検査を待ったほうが良さそうである。